

「言は肉となり」

(ヨハネ1:9～14)

挽地茂男

2018.12.23 日本基督教団千歳丘教会

クリスマスおめでとうございます。アドベントの第4週目を迎えました。蝋燭が4本点っています。今年のアドベントは、アドベントの第1週から、ヨハネによる福音書1章1－18節の「ロゴス賛歌」を少しずつ小刻みに学んでまいりました。今「ロゴス賛歌」と申しましたけれども、ヨハネ福音書の1章1－18節には「言」という単語がたくさん出てまいります。ギリシア語で「言」のことを「ロゴス」と言いますので、この箇所を通称して「ロゴス賛歌」と呼んでいるわけです。「ロゴス賛歌」は、最近の研究では、当時、実際に讃美歌として歌われていたと考えられています。

これは第1週にも申し上げまし



たが、カトリックのフランシスコ会が出しておりますフランシスコ会訳聖書ではこの箇所を、

① 1章1－5節を「賛歌1番」、
③ 1章9－14節を「賛歌2番」、
⑤ 1章16－18節を「賛歌3番」と呼び、それぞれに小見出しをつけて、讃美歌として翻訳しております。そして「賛歌1番」と「賛歌2番」の間の②6



－8節に「洗礼者ヨハネの証し(1)」がはいり、「賛歌2番」と「賛歌3番」の間の④15節に「洗礼者ヨハネの証し(2)」が入っております。全体として「賛歌1番」「洗礼者ヨハネの証し(1)」「賛歌2番」「洗礼者ヨハネの証し(2)」「賛歌3番」という、讃歌とヨハネの証しを組み合わせた（ダブル・サンドイッチ状の／ダブル・チーズバーガーのような）構成になっています。

先週は「洗礼者ヨハネの証し(1)」(6-8節)を読みました。本日はその次の「賛歌2番」(9-14節)ということになります。では9節。「その光は、まことの光で、世に来て

すべての人を照らすのである。」こ



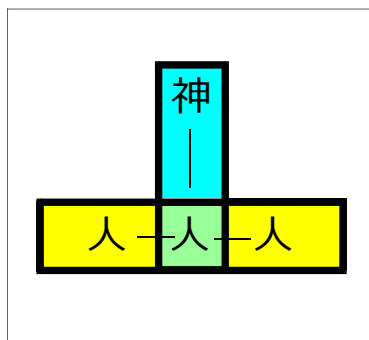
この光は4－5節の「暗闇の中に輝く光」であり、今や、その光が「世に来」ようとしていました。10節では主語が光から、再び、言に代わり、言の

来歴が縮約されます。10－11節。「言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。」世が言によってなり、言は世にあったこと、世は言を認めず、ご自分の民さえ言を受け入れなかったと語ります。ここにはすでに、主イエスの受肉と含意されています。拒絶する人々対照的に受容する人たちがいます。12－13節。

「しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。」「言」は人の認識に訴えます。「光」はより直接的な認識に訴えかけ、反応を要求します。

「光」と「言」は、ともに人の側の認識(認知)を要求します。要求に対する反応は、拒絶か受容か、ということになります。言に対する拒絶と受容の二分法は、暗闇と光の二分法と呼応しています。受容する人たちが「神の子となる資格」を与えられる条件から血縁が排除され、その条件はおよそ人間的なものとは隔絶したものになります。つまり人間的意欲や努力の結果として「神の子」になるのではなく、「信じる」ことを通して、新たに神によって生み出されるのです。

しかしこの「賛歌2番」のクライマックスは、なんと言っても14節です。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」「言が肉となる」、つまり神が人となる。このことによって何が起っているのか、いろんなことが言われるでしょう。しかしまず言っておかなければならない



ことは、神が人となることによって、「神への愛」と「隣人への愛」が結びあわされたということです。神への愛が、人間の身体にきわめて近いところで働く愛となったということです。「善きサマリヤ人の譬え」で言われる、神への愛と人への愛が、現実の形をとったということです。

今回「ロゴス賛歌」を学ぶに際して、マザー・テレサのことを多めに取上げました。マザー・テレサはみなさんご存じのように、カルカッタ(コルカタ)の路上で誰にも看取られず、まるで捨てられるぼろ雑巾のように死んでいく人々の最期を看取る仕事を使命とする「死を待つ人の家」という施設を立てた創設者として有名であります。彼女はこういっています。

「もっともみじめなことは《自分がハンセン病である》ということでも、《HIV 感染者である》ということでも、《自分がガンである》



ということでもなく、《その病気のゆえにだれからも愛されない》ことである」。わ

た私たちのよく知っている有名な「善きサマリヤ人」の譬話にも、半死半生で路上に見捨てられた一人の怪我人が登場致します。主イエスの譬えは、この怪我人に対する人々の様々な反応を描き、神を愛する者が、現実には、人をどのように愛する者となるのかを説きます。サマリヤ人の思いと行動に、主イエスの思いが表現されます。主

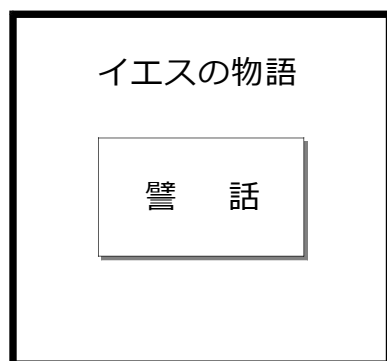


ゴッホ「善きサマリヤ人」1890

イエスの思いに、人間を見る神の思いが重なります。この譬話に込められた「思い」をたどることによって「神が人となられた」その思いに迫りたいのです。本日の聖書の箇所はヨハネによる福音書ではありますが、クリスマスのこの時にこそ「善きサマリヤ人」の物語によってクリスマスの意義を理解し、同時に「善きサマリヤ人」の物語をより深く理解できると考えています。そこでルカ10章の「善きサマリヤ人」の物語を少し丁寧に見る必要があります。

さてルカによる福音書の物語の

多くは特徴的な形式を持っています。つまりイエス・キリストの物語を語りながら、その物語の中に小さな譬話が組み込まれているのです。大きな物語の中に組み込まれた譬話は、物語と相互に説明し合う関係にあります。より小さい譬話が、イエス・キリストの物語



を説明し、イエスの物語も譬話の意味を説明していることが分かります。

つまり蛍光灯でいえば、グロー球「今はほとんど見ることができませんが」と蛍光灯の関係に当たります。グロー球が点きますと全体に光が入るような関係になっております。ですから譬話が分かれますと、イエス・キリストの物語が「あっ、そうか」と理解できますし、その逆にイエス・キリストの物語が分かれますと、譬話の意味に「ぴかぴかぴかっ」と灯りが点るような構造になっております。

今日の物語はイエス・キリストと律法の専門家の問答の物語の中に譬話を組み込む形になっており

ます。まず譬えと物語を分けて、見ていきます。

まず物語で交わされる問答は概ね次のように進行しています。律法の専門家が主イエスを試みようとしてやって来て言います。「先生、何をしたら永遠の命が受け継ぐことができるでしょうか。」主イエスはそれに答えて、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と問い返します。すると律法の専門家は「『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、あなたの神である主を愛しなさい』。また『また隣人を自分ように愛しなさい』とあります」と答えます。その答えを聞いて主イエスは、「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば、命が得られる」と返答しています。この箇所と並行するマタイの福音書では、律法の専門家ではなく、主イエスの口がこの掟を語ります。「³⁷『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。³⁸これが最も重要な第一の掟である。³⁹第二〔の掟〕もこれと同じく重要である。『隣人を自分のように愛せよ。』⁴⁰律法全体と預言者は、

この二つの掟に基づいている」(マタイ22:34~40)。「**律法と預言者**」という言い方は、主イエスの当時に使われていた旧約聖書を指す比喩的表現ですから、全身全霊を持って神を愛することと、自分と同じように隣人を愛すること。つまり《神への愛》と《隣人への愛》を命じるこの二つの掟は、律法と預言者すなわち旧約聖書の全体を支える二本の柱だとされているのです。しかも福音書は、主イエスとファリサイ人・律法学者をライバル関係、あるいは対立的な関係に置きますから、この掟は敵であっても見方であっても、彼がユダヤ人ならば誰であれ大切なもの、大切にしなければならないものとされているのです。最も重要な



掟とか、最大の掟と呼ばれるのはこのためです。このことから次のように拡大して言うことができ

ると思います。つまり第一に、この二つの掟は分けることができない、不可分であるということ。つまり(心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、

神を愛する)《神への愛》と(隣人を自分ように愛する)《隣人への愛》は不可分であるということ。

これらの二つの愛は別々のものとして分けられないということ。二本のうち一



本の柱がなくなれば、全体が崩れるということです。さらに第二に、前者は後者の土台をなすということ。つまり《神への愛》は《隣人への愛》の土台をなすということ。

(心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、神を愛する)《神への愛》は(隣人を自分ように愛する)《隣人への愛》の土台であるということ。そして第三に、後者は前者の具体的展開であるということ。つまり《隣人への愛》は《神への愛》の具体的展開であるということです。(隣人を自分ように愛する)《隣人への愛》は(心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、神を愛する)《神への愛》の具体的展開だということです。

神を愛することと隣人を愛する

ことは別のことではありません。両者は根源的に同じ源に属するものなのです。ヨハネの手紙一は、神を愛すると言いながら、目に見える隣人を愛さないものは偽り者であると語ります。お読みします。

4:16 わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってください。〔中略〕

4:19 わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。

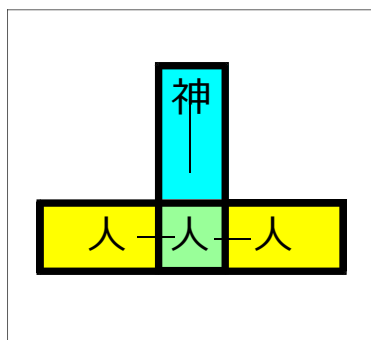
4:20 「神を愛している」と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。

4:21 神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです。これが、神から受けた掟です。(Ⅰヨハ4:16, 19-21)

今お読みしました箇所「兄弟」という言葉は、「隣人」と読み替えても差し支えない言葉です。いかに崇高な言葉が語られようと、如何に高邁な神学が開陳されようと、愛さない者の口からでる、神を語る言葉は空虚であります。神

を恐れ敬う「敬虔さ」つまり「神への愛」と「隣人への愛」は一体のものなのです。これは新約聖書の愛の構造を示しています。つまり神との縦の関係が人と人との横の関係を規定する。縦関係と横関係は不可分に連動するのです。イエス・キリス

トの生涯は、「神への愛」と「隣人への愛」が現実のものとして結



びあわされたものとして生きられました。もう少しサマリア人の物語を見ておきます。

さて、律法の専門家はイエス・キリストに正しい答えをしまし

た。そして主イエスは、「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得

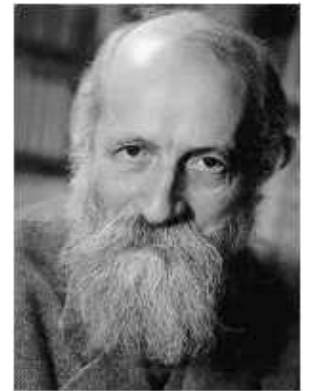


られる。」と答えます。しかし、律法の専門家の実に正しい答えは、イエスの言葉に対する次の彼の反応で、化けの皮が剥がれてしまいます。「しかし彼は自分を正当化しようとして、『では、私の

隣人とはだれですか』と言った」と書かれています（29節）。この律法の専門家の模範解答は、解答のための解答であって、行動のための結論ではありませんでした。行すべき事が示されたときに、まだ議論をしようとするのは、最初から実行する気持ちではなく、25節にあるように、彼が「イエスを試そうとして」質問を投げかけたからです。ですから彼は議論の延長を試み、議論の中に逃げようとしているのです。律法の専門家である彼の本質がこの反応に露わになっています。つまり彼は議論の中に巣造りをして、議論の中に自分の王座を占めると、もうそこからは出てこようとしなない人の典型なのです。主イエスの譬えはこの律法の専門家の根本的な欠落を抉り出すことになります。

譬えを見る前に、隣人や人との出会いや関係について少し考えておきましょう。マルチン・ブーバーという思想家は『我と汝』という本の中で、人は〈なんじ〉（あなたと呼べる存在）を持てば持つほど豊かになる、と申します。それはものをもつ豊かさとは、質的に異なります。そして〈なんじ〉

（あなた）とは人だけに限らず、自然や動物その他芸術品や様々なものをも含めて、その人の慈しむすべてのものが〈なんじ〉となります。そしてついにブーバーは最後に〈永遠の汝〉つまり神をも含めて人は〈なんじ〉を持てば持つほど豊かになると語り、その意味で「すべての真の生とは出会いである」と言い切るのです。



多くの人々がマザー・テレサの働きを「善きサマリヤ人」に見る隣人愛の模範として語ります。しかしテレサにとっては、それは単なる善行で終わるものではなく、彼女は、「死にゆく人々」をとおして、実は神と触れあう時、神と出会う時だと語ります。「私の勇気を褒めてくださる人々に申しあげたいのは、私が、ハンセン病者の体に触れ、言いようのない悪臭を放つ膿の流れる体に触れるたびに、聖体〔聖餐式のパン/ホスティア〕でいただくキリストと同じキリストの体に触れているのだと確信なしには、その勇気はあり得ないということ

す。」聖書の言う愛とは、行動規範としての善行や倫理上の正しさや、まして論理的整合性ではとどまらないのです。

「隣人とはだれか」という律法の専門家が提出した問題は、当時、複雑な議論を含む問題であったことは確かです。（この点に関して詳細は略しますが）当時のユダヤ教においては、民族主義の高まりとともに隣人から他民族を排除する風潮が一般化しておりました。隣人とは同胞のユダヤ人以外にはなく、異邦人は真の神を持たない、汚れた民と考えられていたのです。律法の専門家の議論も、主イエスの譬えもこの時代史的な流れを背景にしております。

さて「たとえ」を見てみましょう。前半で確認した一つの公理、「『神への愛』と『隣人への愛』は一体のものであり、**神との縦の関係が人と人との横の関係を規定するあるいは連動する**」という公



理を頭に置いて、譬えを見てみましょう。エルサレムからエリコへ下って行く道の途中で、強盗

に襲われ、半殺しにされ、道端に放擲された人がまず登場します。エルサレム



からエリコに下る道は、直線で27キロを1000メートル下る急勾配で、箱根の坂や日光のいろは坂のようにぐねぐねとつづら折りになっておりました。ですから非常に見通しの悪い箇所があって、いわゆるブラインドになるような場所があって、そのような場所によく盗賊が出た、注解書などには説明されています。そのような旅の途中で盗賊に襲われて、半死半生で投げ出された人がいた。そこに三人の人々が来合わせます。第一

番目に祭司、第二番目にレビ人、第三番目にサマリヤ人が登場します。第一



の祭司は、神殿に仕える宗教家であって、立場上宗教国家イスラエルの精神的支柱を担う者です。第二のレビ人は、その系列から祭司が選抜される宗教家の家系に属するものです。この最初の二者は、半死半生の男を見ると、向こう側

を通って行って
しまいます。主
イエスが登場さ
せた第三のサマ
リヤ人とは、紀
元前722年の
アッシリア帝国
による北イスラ
エル征服にとも
なって、歴史の
悲劇の一部とし



て生まれた半異邦人の混血の人々
でありました。アッシリア帝国は
北イスラエル王国（当時は南ユダ
王国と分かれておりましたのでそ
の北イスラエル王国）を占領しま
すと、国民の多くを捕虜や奴隷と
してアッシリアに連行し、アッシ
リア人が中心とした異国の人々が
入植してまいります。こうしてこ
のような雑婚の結果生まれたのが
サマリア人だったのです。純血主
義に固執する〔と言われますが、
実際には政治的・宗教的なもっと
複雑な事情が絡みついています
が、とにかく〕ユダヤ人はこのサ
マリヤ人と付き合いをしなかった
とヨハネ福音書は記していますし
（4：9）、旧約聖書の外典ではサ
マリア人の都シケムは「馬鹿者の

町」と呼ばれておりますし（シラ
50:25-26、遺レビ7:2）、「サマリ
ア人」という言葉は「悪霊つき」
と同等の軽蔑的な言葉として使わ
れております（ヨハ8:48）。この
サマリヤ人が半死半生の怪我人を
救済いたします。「この三人のう
ち、だれが強盗に襲われた人の隣
人になったと思うか。」この主イ
エスの問いに対する答えは誰の目
にも明らかです。しかしサマリア
人に対して差別的な感情を持つこ
の律法の専門家の口からは、「サ
マリア人」という答えは口が裂け
ても出てきません。「その人を助
けた人です」と律法の専門家は答
えます。この譬えはユダヤ人の宗
教指導者の宗教性に対する一種の
批判になっていることは明らかで
す。おそらく祭司は、民衆の誰よ
りも多く「神よ」という言葉を自
分の口から発したことでしょう。
またレビ人の口からも「神よ」と
いう言葉が頻繁に出たでしょう。
しかし半死半生の同胞を目の前に
しても、彼らの手や行動によって
その「敬神の念」つまり「神への
愛」は具体的に「隣人愛」として
表現されることはなかったのだ
です。この主イエスの最後の問いか

けは、律法の専門家を、民族的な枠を打破した、隣人愛の普遍性に直面させます。「行って、あなたも同じようにしなさい。」



レンブラント「善きサマリア人」1630

ですから重要なことは、「隣人になる」というイエス・キリストの言葉にあらわれます。それは律法の専門家の「隣人である」という表現と比較すると明らかです。「隣人」とは律法の専門家にとっては区別の概念なのです。「イスラエル人は隣人」、「サマリア人は隣人ではない」、「この人は隣人」、「あの人は隣人ではない」という区別の概念なのです。レッテルなのです。しかしイエス・キリストは「隣人になる」といいます。主イエスにとって「隣人」とは「この人は隣人」、「あの人は隣人ではない」というような区別の概念ではなく、行動のための概念、行動概念

なのです。つまりここでは、隣人とは、《隣人になる》ことによってしか生まれてこないことをイエスの表現は示唆しているのです。隣人とは「誰か？」と問うものではなくて、また隣人とは住んでいる距離の近さを言うのでもなく、隣人とは《隣人になる》ことによって初めて生まれてくるのです。律法の専門家の発想が名詞的だとすれば、イエスの発想はきわめて動詞的なのです。今日の聖書箇所ヨハネ1章11節にはこう書かれています。「1:11 言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。」拒絶に遭遇しながらも、しかし主イエスは〈隣人になる〉ことによって、隣人を生み出していったのです。そして隣人が隣人を呼び、やがて教会の母体を創っていったのです。そのことを後代に総括した表現がヨハネ1章12-13節です。「1:12 しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。1:13 この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。」

マーチン・ルーサー・キング牧師の書かれた『汝の敵を愛せよ』



という有名な説教集の中で、キング牧師は、「善きサマ

リア人の譬え」について語っています。その中でキング牧師は、次のようにサマリア人の行動を説明しています。このサマリア人は祭司やレビ人とは違って「自分がこの人を助けるために立ち止まったら、自分に何が起こるだろう」と考えずに、「もし自分がこの人を助けるために立ち止まらなければ、この人にどういう事が起きるだろう」と考えた、と説明しています。つまり私たちの行動において重要な点は、「このことをしたら自分に何が起こるだろうか」という発想ではなく、「もしこのことをしなければその人に何が起こ



るだろうか」という発想だということです。またそれをさらに実例を挙げて、シ

ュヴァイツァーは「自分がアフリカの民衆と共に働けば、大学教授

としての自分の信望や安全に何が起こるだろうか、またバッハのオルガン曲演奏者としての自分の地位に何が起こるだろう」とは考えずに、「もし自分が彼らの所へ行かなければ、不正義の力によって傷つけられた民衆はどうなるだろうか」と考えたと言います。そしてリンカーンは「私が奴隷解放宣言を発して、私有奴隷制に終止符を打てば、自分に何が起こるだろうか」とは考えずに、「もし自分がそれをしなければ、国家と



おびただしい数の黒人たちに何が起こるだろう」と考えた、と説明します。つまり私たちの行動において重要な点は、「このことをしたら自分に何が起こるだろうか」という(対自的)発想ではなく、「もしこのことをしなければその人に何が起こるだろうか」という(対他的)発想だということです。相手の必要から発想されたとき、差別が超えられていくのです。エリコに向かう途上で強盗に襲われ、瀕死になったこの人は人種や宗教によって識別されてはならない、彼の身

に起こったことのみによって識別されなければならないのです。旅をしていたあのサマリア人は、強盗に襲われた人の「そばに來ると、その人を見て憐れに思い」(10:33 Σαμαρίτης δέ τις ὁδεύων ἦλθεν κατ' αὐτὸν καὶ ἰδὼν ἐσπλαγχνίσθη ルカ10:33)、介抱し始めるのです。そこに困難にあえぐ人々がいる、そこから発想されなければならないのです。

主イエスは何故この世界に生まれたのでしょうか。主イエスは何故この世界に駆け寄ったのでしょうか。神は何故、人と成られたのでしょうか。人への思いが、神を動かしたのです。第1週に読みましたケセン語訳のヨハネ福音書をもう一度思い出しましょう。1章1－5節。気仙語でお読みします。

1 初(は^す)めに在ったのァ
神様の思いだった。
思いか° 神様の胸に在った。
その思いごそァ神様そのもの。

2 初(は^す)めの初めに神様の
胸の内(う^ぢ)に在ったもの。

([□]は気仙語独特の発音であることを示す)

3 神様の
思いが凝^こって
あらゆる物ァ生まれ。

それ無^すに
生まれだ物ァー^{ひと}ぢもねァ。

4 神様の思いにァ
あらゆるものォ生が^す力(^ぢから)ァ
有って、
それァ又、
生ぎる喜びィ人の世に
輝か^す光だった。

5 光ァ人の世の
闇ィ照ら^すてだったのに、
闇に住(^す)む人ァその事に
氣ァ付(^ぢ)かねァでだったんだ。

1:14 言(神様の思い)は肉となつて、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であつて、恵みと真理とに満ちていた。神が人となる、それは人に対する神の思いの表れなのです。神の思いが体をとって、具体的になったのです。神の愛が、人間の身体にきわめて近いところで働く愛となったのです。サマリア人がけが人を「憐れに思う」という言葉は、「主イエスが…憐む」という時と同じ〈スプランクニゾマイ〉という言葉が使われています。これは、原意を生かして訳すと「主イエス——またサマリア人——は「腸(は



らわた) がちぎれる思いに駆られて」という意味なのです。この憐れむという言葉 (σπλαγχνίζομαι **スプランクニゾマイ**) は、元来「内臓」、すなわち腸や肝臓・腎臓などを指す名詞 (**スプランコン**) に由来しています。古代では内臓は人間の感情の座であると見なされていたため、この言葉は「憐れみ、愛」などの意に転化し、それが動詞化したのです。ですからこの動詞は、日本語で使われる「断腸の思い」という表現がもつのと近い意味やニュアンスを持っているのです。神が人となることによって、その愛は人に対して(具体的な体をもった)〈はらわた〉からわき起こる愛として人の世界に現れたのです。

主イエスは、十字架に至るまで、徹底的にこの愛に生きることによって、主イエスの〈**スプランコン**〉は、つまり〈はらわたのうめき〉は集団共通の行動原理としての倫理 (ethics) の基礎を形成する民族 (ethnos) の境界線を越えたのです。主イエスのご降誕を憶えつつ、今日も、新しい1週間に向かって、主と共に歩み出しましょう。



1:1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。

1:2 この言は、初めに神と共にあった。

1:3 万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。

1:4 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。

1:5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

1:6 神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。

1:7 彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。

1:8 彼は光ではなく、光について証しをするために来た。

1:9 その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。

1:10 言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。

1:11 言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。

1:12 しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。

1:13 この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。

1:14 言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。

1:15 ヨハネは、この方について証しをし、声を張り上げて言った。

「『わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。」

1:16 わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。

1:17 律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。

1:18 いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。

1·1 Ἐν ἀρχῇ ἦν ὁ λόγος, καὶ ὁ λόγος ἦν πρὸς τὸν θεόν, καὶ θεὸς ἦν ὁ λόγος.

1·2 οὗτος ἦν ἐν ἀρχῇ πρὸς τὸν θεόν.

1·3 πάντα δι' αὐτοῦ ἐγένετο, καὶ χωρὶς αὐτοῦ ἐγένετο οὐδὲ ἓν. ὃ γέγονεν

1·4 ἐν αὐτῷ ζωὴ ἦν, καὶ ἡ ζωὴ ἦν τὸ φῶς τῶν ἀνθρώπων·

1·5 καὶ τὸ φῶς ἐν τῇ σκοτίᾳ φαίνει, καὶ ἡ σκοτία αὐτὸ οὐ κατέλαβεν.

1·6 Ἐγένετο ἄνθρωπος ἀπεσταλμένος παρὰ θεοῦ, ὄνομα αὐτῷ Ἰωάννης·

1·7 οὗτος ἦλθεν εἰς μαρτυρίαν, ἵνα μαρτυρήσῃ περὶ τοῦ φωτός, ἵνα πάντες πιστεύσωσιν δι' αὐτοῦ.

1·8 οὐκ ἦν ἐκεῖνος τὸ φῶς, ἀλλ' ἵνα μαρτυρήσῃ περὶ τοῦ φωτός.

1·9 Ἦν τὸ φῶς τὸ ἀληθινόν, ὃ φωτίζει πάντα ἄνθρωπον, ἐρχόμενον εἰς τὸν κόσμον.

1·10 ἐν τῷ κόσμῳ ἦν, καὶ ὁ κόσμος δι' αὐτοῦ ἐγένετο, καὶ ὁ κόσμος αὐτὸν οὐκ ᾔγνω.

1·11 εἰς τὰ ἴδια ἦλθεν, καὶ οἱ ἴδιοι αὐτὸν οὐ παρέλαβον.

1·12 ὅσοι δὲ ἔλαβον αὐτόν, ἔδωκεν αὐτοῖς ἐξουσίαν τέκνα θεοῦ γενέσθαι, τοῖς πιστεύουσιν εἰς τὸ ὄνομα αὐτοῦ,

1·13 οἱ οὐκ ἐξ αἱμάτων οὐδὲ ἐκ θελήματος σαρκὸς οὐδὲ ἐκ θελήματος ἀνδρὸς ἀλλ' ἐκ θεοῦ ἐγεννήθησαν.

1·14 Καὶ ὁ λόγος σὰρξ ἐγένετο καὶ ἐσκήνωσεν ἐν ἡμῖν, καὶ ἐθεασάμεθα τὴν δόξαν αὐτοῦ, δόξαν ὡς μονογενοῦς παρὰ πατρός, πλήρης χάριτος καὶ ἀληθείας.

1·15 Ἰωάννης μαρτυρεῖ περὶ αὐτοῦ καὶ κέκραγεν λέγων, Οὗτος ἦν ὃν εἶπον, Ὁ ὀπίσω μου ἐρχόμενος ἔμπροσθέν μου γέγονεν, ὅτι πρῶτός μου ἦν.

1·16 ὅτι ἐκ τοῦ πληρώματος αὐτοῦ ἡμεῖς πάντες ἐλάβομεν καὶ χάριν ἀντὶ χάριτος·

1·17 ὅτι ὁ νόμος διὰ Μωϋσέως ἐδόθη, ἡ χάρις καὶ ἡ ἀλήθεια διὰ Ἰησοῦ Χριστοῦ ἐγένετο.

1·18 θεὸν οὐδεὶς ἑώρακεν πώποτε· μονογενὴς θεὸς ὁ ὢν εἰς τὸν κόλπον τοῦ πατρὸς ἐκεῖνος ἐξηγήσατο.